

主 題：キリスト者の自由とは

聖書箇所：コリント人への手紙第一 6章12-20節

聖書をお持ちでしたら、Iコリント6：12をお開き下さい。

さまざまな問題を抱えていたコリントの教会、彼らはまたグノーシス主義という考え方の影響を受けていました。つまり目に見えない霊を尊重し、目に見える肉体を悪であるとして、価値のないものとして蔑んでいました。こういった考え方から、二つの主義が生まれてきます。一つは禁欲主義です。肉体のもたらす欲望を徹底して押さえ込もうとする主義です。もう一つは快樂主義です。欲望の欲するままに自分の好きなことを行おうとする主義です。実はこのコリントの町もそうだし、このコリント教会の中には、こういった快樂主義が蔓延していたのです。それが問題でした。

◎ 二つのスローガンの意味

そのことを踏まえた上で、きょう私たちが見ていくテキストの中に二つの標語、スローガンが記されています。12節「すべてのことが私には許されたことです。」、これが一つ目です。二つ目は13節の初め「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにあります。」ということです。コリントの人たちはどうもこの二つのスローガンを使っていたようです。どういう意味なのかを見ていきます。

①「すべてのことが私には許されたことです。」

これは恐らくイエス・キリストを信じたクリスチャンの自由について、パウロが彼らを教える時に使った標語を彼らも使っていたのでしょう。ただ問題なのは、コリントの教会の人々はパウロの教えたこの標語を自分たちに都合のよい解釈をもって使っていたということです。彼らが使っていたこのことばは、パウロが使ったように使ってはいても、全く意味が異なっていたということです。彼らはクリスチャンは自由なのだから、悪であり、価値のない肉体がしたいとすることを好きにさせてやればよいと考えるのです。要するに我々は自由だから自分の肉欲の欲するままにさせればよい、そんなふう生きても構わないのだと彼らは考え、そのように行っていたのです。もちろん先ほどもお話したように、これはパウロが教えたキリスト者の自由ではありませんでした。

②「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにあります。」

これについて、新約解釈の教授でもあったA・T・ロバートソンは「この標語は性的放縦を正当化するためにコリントにおいてある人々が恐らく使っていたのであろう」と教えます。

つまりコリントの人々がこの二つの標語を使っていたということが、私たちに何を教えるかということ、この教会の中においてはこういう性的墮落が容認されていたということです。性的に大変乱れた人々がこの群れの中にいたということです。もちろんこの町にそのような人たちがあふれていたというのは言うまでもありません。ですからパウロはこの人々に対してキリスト者の自由とは一体何なのかについて再び教えを与えていきます。その教えに私たちはしっかりと心を向けたいと思います。

A. キリストにより与えられた自由 12-14節

まずパウロは12-14節でキリストに与えられた自由について教えます。私たちがキリストによって与えられた自由を話すためには、「キリスト者の自由」を本当に自分のものにしておく必要があります。でなければ自由を楽しむことができない。

1. 自由を得る ヘブル2：14-15、ガラテヤ5：1

どうしたらこのキリスト者の自由を得ることができるのか、そこから始める必要があります。それにはまず間違いなく救いが必要だということになります。私たちはみんな例外なく罪の奴隷として生まれてきました。そのためなすことすべて神の基準に、みこころに反することばかりでした。しかも、悲劇はどんなに心を入れ替えようと、その奴隷状態から抜け出すことは私たちには不可能であったということです。どんなにいいことを行おうと私たちは罪の奴隷という束縛から、罪の呪いから、罪のさばきから逃れるすべはなかったということです。神が憐れみと愛に満ちたお方であるゆえに、この方が私たちのために解放の道を備えてくださり、そして私たちを解放してくださった。なぜイエス様がこの地上にお見えになったのか——。ヘブル書の著者が言うように「子たちはみな血と肉とを持っている」、つまり我々人間はみんな血と肉を持っているので、「主もまた同じように、これらのものをお持ちになりまし

た。」、そしてその後に目的が記されています。「これは、その死によって（イエス様の死によって）、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」とあります。この著者が教えるように、イエス様がこの世に人として来られ、十字架で身代わりとなって死んでくださり、そしてその復活によって我々に希望が与えられたということです。この身代わりの死によって、私たちに救いの道が備えられたのです。キリストは自由を得させるために、私たちに「解放して」くださいましたと。あなたが自由を得るために、神はあなたを「解放して」くださった。罪の救いをいただいて初めて私たちは自由人としての歩みをなすことができるのです。ですから、このキリストにある自由というものを私たちが楽しむために、自由人として我々が生きていくために、まず私たちはこの罪の赦しをいただくことが必要です。その救いは絶対条件であるということです。

パウロは、既に前回見た6：11で、我々クリスチャンがどのような存在なのかを教えています。

「主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」とあります。私たちの過去も現在も未来もすべての罪の汚れを主は洗ってくださった。まだ洗われていない残されている罪はどこにも存在しない。そして罪が赦されている私たちは神の前に聖なる者、義なるもの、正しいと宣言してくださった。これが救いであり、この救いにあずかったあなたも私も罪から解放されて自由となったのです。

では、すべての罪が赦されて自由とされたら、コリントの人々が考えたように肉欲の赴くまま、好きなことをしてもいいのかわかるか。実はパウロに同じことが問われたことがありました。パウロが恵みによる救いのメッセージをローマで語った時に、そのメッセージを聞いてある人々はこんなふうに思ったのです。ローマ6：1「恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべき」だろうか。ということかということ、パウロが行いによるのではなく信仰によって、神の恵みによって私たちは救われるのだと教えたメッセージを聞いたある人々は、それは人々に罪を犯すことを推奨することになると言って反対するのです。神が赦してくださった、では赦されたら何をして構わないというふうに考えないかと。好きなように生きて、楽しめばいいと考えないか、きっとそんな人が増えるに違いないと人々はこのパウロのメッセージに反対するのです。そこでパウロは彼らに対する答えをローマ6：2に与えています。「絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。」と。

ですから肉欲の赴くまま好きなことをしてもいいのかわかるか答えはノーです。すべての罪が赦されて、自由とされたのだから欲望の赴くまま、好きなことをしてもいいと考える人々は悲しいことに救いの本質がわかっていないのです。あなたはそれが何かご存じですよ。救いというのは、罪の奴隷を神の奴隷として生まれ変わらせることです。でも悲しいことに生まれながらに私たちは罪に仕える奴隷なのです。もっと言えばその背後にいるサタンに仕えていた奴隷でした。でも救いによって、私たちに救ってくださった神の奴隷として生きることが赦されたのです。パウロが言います。「神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」、ローマ6：17-18です。私たちは義の奴隷、神の奴隷として生まれ変わったのです。それが救いです。

2. 自由を得た者の責任 12節

では私たちは神の奴隷とされた者として、どんな責任を神様からいただいているのか——。自由を得た者の責任がこの12節に記されています。もう一度見てください。「すべてのことが私には許されたことです。しかし、すべてが益になるわけではありません。私にはすべてのことが許されています。しかし、私はどんなことにも支配されはしません。」、繰り返しますが、自由人として生きるということ、キリストにある自由人として行動するということは何でも好きなことをしても構わないということではないということです。ペテロも「あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷として用いなさい。」とIペテロ2：16で言います。つまり彼が言いたいことは、神の奴隷として救われた私たち信仰者はこれまでとは異なる新しい歩み、自由人の生き方をすることができる者へと変えられたのだ、新しい目標と目的を持って新たな知恵と力によって生きる人生を歩み始めたということです。それは主のために生きるという新しい人生であると。2コリント5：15には「キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」とあります。自由人というのは、罪赦され罪の奴隷から神の奴隷とされた私たちというのは、私たちに救ってくださった方のために生きるように新しくされたと。だから皆さんも私は神によって新しくされたのだと、神のために生きる者として生まれ変わったのだと、間違いなくそのことをご存じだし、そのように歩もうとしておられるはず。でも確かにそのように生きようと決心したとしても、非常に難しいということは日々の生活で経験されていると思います。そこで先ほど

からお読みしているこの I コリント 6 : 12 でパウロはどうしたらいいのかを教えてください。

1) **正しい選択の責任** 12 節

パウロがまず言うのは「**すべてのことが私には許され**」ているということです。私は何でもできるように許されているのだと、辞書はこのことばを訳します。つまり私はどんなことでもしても構わない。しかしそこには**選択の責任**があることを同時に教えます。どんなことでもできるから自由人なのです。救いにあずかった私たちは神を喜ばせることもできるし、神を悲しませることもできる、だから自由なのです。ですから、自由人とされた**私たちが注意しなければいけないのは、そこには**選択の責任**がある**ということです。全くルールのない自由の話ではないのです。ちゃんとそこには**神のルール**が存在しているのです。正しい**選択**についてパウロはここで二つのことを言っています。

(1) 「**罪を避ける**」:

一つ目は**罪を避けなさい**ということです。「しかし、**すべてが益になるわけではありません。**」と言っています。「**益になる**」というのは**益を与える**とか、**よりよくする**とか、**有益**とか、**役に立つ**という意味です。つまり**栄光を現わすのに益となる**こと、また**私たちがイエス様に似た者**に変えられたいくため、つまり**霊的に成長するために益となる**ことを**選びなさい**と言っているのです。何が自分の信仰の成長に役立つものなのか、何が助けになるのか、そのことを**正しく選択**しなさいと。罪はどんな罪でもあなたの成長を助けるものではありません。罪はどんな小さな罪でも神の栄光を現わすことには**絶対にならない**のです。ですからパウロは**すべてが益になるわけ**ではない、**選択の自由**はあるけれども、**選択**できる**すべてのことが自分にとって役に立つとは思えない**と言うのです。そのとおりです。繰り返しますが、**罪は絶対**にあなたの役には**立たない**のです。だから**私たちが罪を避けなければならない**。

(2) 「**罪の支配を許さない**」:

二つ目に**彼が言うのは、罪の支配を許さない**ということです。「**私はどんなことにも支配されはしません。**」と、「**支配**」というのは**権利を行使**するとか、**主権を持つ**ということです。罪から解放されて自由とされた我々クリスチャンが**しっかりと選ばなければいけないのは、罪が私自身を支配**することを**絶対に許さない**ということです。パウロはイエス様に自分の**すべてを支配**していただくことを願いました。彼の言動も思いも考えもその**すべてを主に支配**し続けていただきたいと願った。ではどうしたら私の**すべてを主に支配**していただくことができるでしょう——。御霊に満たされることです。我々の**すべてをこの方に明け渡して、この方が私のすべてを支配**してくださることを願って歩いていくのです。

パウロがこのように教えるのは**神様を喜ばせたい**からです。みこころに従っていきたくからです。なぜなら**そうやって生きるのが神の奴隷**です。奴隷は主人を喜ばせることだけを願って生きるのです。パウロは**神の奴隷**とされたゆえに**神だけを喜ばせよう**、そのためには**神のみこころに従って**いきたくし、**神を喜ばせることを行って**いきたくし、**考えて**いきたくし、**語って**いきたくし。すべてにおいて**そうでありたい**、そのためには**神の助けが必要**なのです。ですから**彼は、私はキリスト以外の何者にも自分を支配**させることを**許さない**と教えるのです。私たちの主人は**主**なのです。ですから**キリスト者の自由**というのは**みずからの意思**をもって**罪から離れ**、**神に喜ばれる**ことを**選択**して生きる自由なのです。何をしても構わない。しかし、**私たちは神が喜ばれる**ことが何かを**考えて**それを**みずからの意思**をもって**選択**する自由を**いただいた**のです。選択の**責任**があることをパウロは教えます。

2) **神の目的を正しく知る責任** : **からだの本当の目的** 13-14 節

同時に、我々は**神様の目的を正しく知る責任**があることを13-14 節でパウロが教えます。「**食物は腹のためにあり、腹は食物のためにあります。**」、最初にもお話ししたように、コリントの教会の人たちの中にこの**キリスト者の自由**をはき違えていた者たちがいました。というのは、この標語は**性的放縦**を正当化するために使われていたと初めにお話ししました。彼らは**そういう意味**で使っていたのです。まさに**それを使う**ということは**そういうふう**に彼らが生きていたからです。

(1) 「**誤った理解**」 13 a 節

その意味を見ていきましょう。「**腹**」というのは「**胃**」と訳すことができます。人間の胃袋のことです。胃と食べ物とは切り離すことができない**関係**にあるのです。お腹が**すく**と**食べよう**とします。そして**食べると胃は消化の働き**を始める。なくてはならない**関係**です。ですから「**食物は腹のため……腹は食物のため**」だと彼は考えたのです。問題なのはこの「**腹**」と「**食物**」の**関係**を**からだ**と**不品行**の**関係**に当てはめたことです。ですから「**ところが神は、そのどちらをも滅ぼされます。からだは不品行のためにあるのではなく、主のためであり、主はからだのためです。**」と。確かに「**不品行**」ということばが記されていますが、我々は先週 6 : 9 で「**不品行**」と「**姦淫**」というのを学びました。「**不品行**」は**未婚の男女**における**性的な罪**のことです。「**姦淫**」は**既婚の間**における**性的な罪**の話です。ですから**ひよつとしたら肉欲**と言った方がいいかもしれません。何とか自分の**性的な満足**を得るために、**内側からこみ上げてくる**ような**欲望**や**性欲**や**情欲**と**からだの**関係****にこの「**腹**」と「**食物**」の**関係**を当てはめるのです。つまり彼ら

はからだは肉欲と性行為のためであり、性行為はからだのためだと考えたのです。

食欲がわくと食べるように、肉欲がわくとそれを満たそうとからだは動く。彼らはどちらも自然な行為だからどこが悪いのだと言うのです。肉欲の赴くままに性行為を行っても構わないというのが彼らの考えです。今の私たちの住んでいる社会とほとんど同じです。フリーセックスの時代になって、結婚していない者同士が自由にセックスをするようになった。残念ながら神のみことばに照らし合わせるとそれは罪です。既婚者の間だけです。でも既婚者の間でも不倫というのが認められるような社会になっている。聖書的に言えばそれも罪です。パウロはそのことを徹底的に教えていこうとするのです。でもこうしてこのみことばを見る時に、コリント教会の中にあった問題がどういう問題だったのかを見ることが出来ます。性的に非常にルーズな状態にあったのです。

(2)「正しい理解」：からだの尊さ 13b-14節

そこでパウロは神は食べ物を消化するために胃を造られた。しかし、「不品行」を行うためにからだを造られたのではないと教えます。ですから13節後半から14節にからだのことについて、一体何の目的で与えられたのかを教えています。

13節「ところが神は、そのどちらをも滅ぼされます。」、つまりこの「腹」にしても「食物」にしても、これは地上での生活に限定され、一時的なものであって永続するものではないということです。神様はそれを滅ぼされてしまう。なぜなら私たちが天国に行って、ああ、お腹すいたわと思うことがあるのでしょうか？そういったものからも解放されているのです。食べなければ死んでしまう、そんなことはあり得ないのです。今私たちが地上で生きている間のことなのです。

その話をした上で、でもからだは違うとパウロは言うのです。「どちらをも滅ぼされます」と言った後、「からだは不品行のためにあるのではなく、主のためであり、主はからだのためです」と言います。からだは滅ぼされないのだと言っています。今私たち信仰者が待ち望んでいるのはイエス様が帰って来てくださる日です。我々を迎えてくださることを待っています。もちろん私たちの愛する主にお会いすることができる、すばらしい希望です。でも同時にその時に私たちには栄光のからだを与えられることを聖書は教えています。この罪のからだから完全に解放されて、主イエス・キリストに似た栄光のからだをいただく日が来るのです。そのことを引き合いに出して、だからコリントの教会が考えるからだの不品行の相関関係がまさに間違っているのだということのパウロは教えるのです。「からだは不品行のためにあるのではなく、主のためであり、主はからだのためです。」と。

パウロはこうして、からだは何のために用いるべきなのか、だれのために用いるべきなのかを教えます。からだを主のためにだけ用いなさいと。それが主が私たちからだを与えてくださった真の目的だと言うのです。そしてその後「主はからだのためです」と続きます。つまり主ご自身があなたや私のからだに気を配ってくださっていること、気にかけてくださっているということです。つまり我々が主のためにからだを用いていこうとする時に、主が助けを備えてくれるということです。

B. キリストと一体とされた者 15-18節

パウロはこうして何のためにからだを与えられているのかをコリントの教会の人々に正しく教えるのですが、彼らはそれを正しく用いていなかったゆえに、続けて彼らを戒めるのです。

我々はキリストと一体とされた者なのだと言います。15-18節「あなたがたのからだはキリストのからだの一部であることを、知らないのですか。」、私たちはキリストのからだの一部であると。お気づきになりました？この15節のところで、「あなたがたは……知らないのですか」とまた出てきています。この6章に「あなたがたは……知らないのですか」といった表現が6回出てきます。6:2、3、9に出ていました。そして4番目に出てくる箇所が今見ている15節です。「あなたがたは……知らないのですか」という修辞疑問を使うことによって、当然読者たちはこの話を既に聞いていたし、このことを知っていた。だから「あなたがたは……知らないのですか」、「学んだのだから知っているでしょう」とパウロは言うのです。

1. キリストのからだの一部：キリストとの関係を正しく覚えること 15a節

彼らは何を知っているはずだったのか——。我々クリスチャンはキリストのからだの一部であるということです。つまり主イエス・キリストと私たちキリストを信じる者たちとの密接さを意味しているのです。からだの一部で、二つからだがあるということではないのです。イエス様のからだの一部であると。パウロは、エペソ5:30で「私たちはキリストのからだの部分だからです。」と言っています。またローマ12:5の中でも「大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」と教えます。我々信仰者は神様とどんな関係にあるのか、イエス様とどんな関係にあるのかと言うと、我々はキリストのからだの一部であり、それほど密接だということです。

2. 遊女のからだの一部：重大な罪 15b節

それを話した上でパウロはこう続けます。「キリストのからだを取って遊女のからだとするのですか。」、

つまりキリストのからだの一部であるクリスチャンが「遊女」つまり売春婦のからだの一部となることです。どうしてそういうことを神が喜ぶかと言うのです。それが私たちの主イエスを汚す行為であるということは言うまでもない。そこでパウロは「そんなことは絶対に許されません。」と言うのです。このことばは彼の強い意思を表わしています。

その理由

① 人との交わりの神秘さ 16節

16節「遊女と交われば、一つからだになることを知らないのですか。『ふたりの者は一心同体となる。』とされているからです。」また出てきました。「あなたがたは……知らないのですか」の第5番目です。知ってるでしょうと。この16節の「ふたりの者は一心同体となる。」は創世記2：24で神が定めた結婚のメッセージを引用してここに記しています。そこには「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」とあります。この「妻と結び合い」というのは、妻と夫の最も密接な関係を指しているのです。性行為の話です。それによって「ふたりは一体となる」と。ふたりではない、ひとりなのだ。それはこの6：16に「交われば」ということばが出てきますが、そのことばがそれを明らかにしています。この「交わ」るということばは創世記2：24の「結び合」うと非常に似たことばですが、膠でくっつけるとか、堅く結びつける、密着させるという意味です。膠を使ってくっつけるといのは今の多くの人にはわからないでしょうが、今で言えば瞬間接着剤みたいなもので、絶対に離れない、そういうものでくっつけるといことです。夫婦というはその親のもとを離れ、一つのからだとして結び合い、一つのからだとしての生活を始めていく、これが主の定めた結婚です。ですから夫婦の間に特別な、密接な関係が存在すると。親から離れてふたりが一つとしてくっつくのです。パウロはその「交わ」るといことばを遊女との関係で使っています。「遊女と交われば、一つからだになることを知らないのですか」、キリストのからだの一部であるクリスチャンが「遊女と交わ」る、売春婦との性行為によって一体となることがどうして神の栄光を現わすことなのかと。神の栄光を汚すことはあっても、現わすことは絶対にあり得ないと。だからそんなことはあり得ない話だ、絶対に許されませんと。そのことばが何度も何度もパウロによって繰り返されています。

② 主との交わりの神秘さ 17節

その罪の大きさ、恐ろしさを教えるパウロは、いま一度救いの祝福を彼らに教えて行きます。17節「しかし、主と交われば、一つ霊となるのです。」とあります。私たちが教えられているのは、まさに性行為というものは肉体的な一体をもたらすのだと。しかし主と「交わ」ること、つまり救いというものは主と霊的な一体をもたらすといのです。夫婦はその特別な関係に入れられるのです。でもイエス・キリストを信じ、この救いにあずかる時に、神様とその人は特別な霊的な一体となる、より密接な関係に入れられるといことです。ですからみことばによってガラテヤ2：20「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」と教えられています。この霊的な一致、霊における一致といのは大変密接なものであって、肉体的な一致よりもさらに深いものです。Iコリント2：16では「私たちに、キリストの心がある」と言っています。主イエス・キリストの救いにあずかった人にはキリストの心が与えられる、だから私たちは神が喜ばれることを探ろうとするのです。神が喜ばれることを愛する者へと変えられるし、神が憎まれる者を憎む者へと変えられていく、私たちはこのような特別な関係に入れられたのだと教えています。

③ 罪への警告 18節

それを教えた上でパウロはこう言います。18節「不品行を避けなさい。」と罪への警告が出てきます。これは現在形の命令です。継続して「不品行」から離れなさい。それを「避けなさい」。つまり「不品行」から逃げていきなさい、近づいてはならないと。そのような考えが心に浮かんで来るなら、そういう思いが心に浮かぶなら放っておいてはいけない、すぐに主のところに逃げるようにと。というのは、こういう誘惑に勝利する方法の一つは逃げることだからです。なぜなら実際にあのヨセフはそうして誘惑に打ち克ったのです。彼がエジプトでパロの廷臣で侍従長のポティファルという人物の手に売られて行きます。神はヨセフを大変祝され、どこにいても成功するのです。ところがこのポティファルの妻が彼に言い寄ってくるのです。そのときにヨセフが何をしたかが創世記39：12に記されています。「彼女はヨセフの上着をつかんで、『私と寝ておくれ。』と言った。しかしヨセフはその上着を彼女の手に残し、逃げて外へ出た。」と。彼の歩みが私たちに教えてくれるのは、罪に勝利する方法の一つは、誘惑に近づかないこと、誘惑から一目散に逃げることです。

パウロは「不品行を避けなさい。」と言った後、この「不品行」の罪の恐ろしさを教えています。「人が犯す罪はすべて、からだの外のもので。しかし、不品行を行なう者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。」と。「人が犯す罪はすべて、からだの外のもので」、このリストには「不品行」は入っていません。「不品行」以外の罪の話です。「不品行を避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のもので。し

かし、不品行を行なう者は」、つまり人の犯す罪の中に「不品行」を含んでいないということです。なぜパウロがこんなことを言ったのかというと、「不品行」の罪の特異性、また罪がもたらす大きなダメージがあるからです。もちろん罪は全部罪です。でもこの性的な罪というのは、大変なダメージをもたらすからです。例えば特別な罪悪感をもたらしたり、ある人は自分の汚れに苛まれたり、憎しみや恨みをもたらしたり。またこういう罪によって夫婦関係や家庭を破壊することにもなってしまいます。またこの罪によって大変な病にかかってしまうこともある。ですから「自分のからだに対して罪を犯す」、大変大きな罪であるとパウロがここで語るのです。

今私たちがこうして見てきたのは、何をしても構わない、まさに今の社会と類似した約2000年前のコリントの町、コリントの教会の中の大きな問題でした。自分が楽しめば何でもいいや、人に迷惑をかけなければそれでいいやと。そういう世の中になってきている中で、神を喜ばせることがいかに難しいかというの我々はよく知っています。私たちがしなければいけないのは、神がこういった問題について何と言われているかを学ぶことです。このような罪は時代が変わろうと存在するというものです。繰り返しますが、神はセックスというものを夫婦の間に与えたのであって、それ以外のセックスというのは罪です。結婚していない者同士がそのような関係に至るのも罪です。それがみことばが私たちに教えることです。

C. キリストがからだの所有者 19-20節

そして、最後の19-20節に私たちのからだの所有者はキリストだということを明らかにします。19節「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。」と。また「あなたがたは……知らないのですか」と出てきました。ですからこのメッセージはコリントの人たちにとって初めて聞くメッセージではなかったのです。でもやはり人間というのは罪深いもので、自分の思いどおりに生きていきたいとしてその誘惑に負けてしまうのです。だからいま一度パウロはその真理を思い起こさせようとするのです。「からだ」も「宮」もどちらも単数形の名詞です。ですからこのみことばが言っているのは、群れとして全体の話をしているのではなく個人個人の話です。各クリスチャンのからだの話です。「宮」というのは神の霊が住むところとして、「神殿」や「聖所」という意味があります。こういったことばを使うことによって、パウロが言いたかったのは、救いにあずかっているあなたがたひとりひとはまさに聖所であるということです。なぜかというところに神がおられるからです。聖霊なる神様があなたのうちに住んでおられるからです。先ほど見た6:11にあったように、神様からすばらしい救いをいただいた。でも救いをいただくということは、聖霊なる神があなたのうちに内住するということでもあります。ヨハネの福音書が我々に教えるように、イエス様が、また父なる神がともに私たちのうちにいてくださる。だから我々ひとりひとり、あなたのからだも私のからだも聖所であるということです。しかもこれは神様から与えられた聖霊の宮です。私たちが何か努力して勝ち取ったものではない。神が私たちにこのようなすばらしい祝福を下さったのだと。

◎ 覚えるべきこと

① 不品行がどれほど神の聖さを汚すものであるかということ

ですからパウロは我々クリスチャンがこの不品行の罪、性的な罪を犯す時、その罪はまさに神の宮の中で犯しているようなものだと言うのです。なぜなら我々自身が聖霊の宮なのでしょう？私たちがこのような罪を犯す。まさにそれはあの神殿の中で、あの聖所の中でこのような性的罪を犯すのと同じだと。聞こえてきませんか？「そんなことは絶対に許されません。」と言うパウロの声。ですから私たちが覚えるべきことは、不品行がどれほど神の聖さを汚すものであるかということ。そして私たちはイエス様のおことばを知っているのです。人が情欲をいだいて女を見るならば、もう既にあなたは姦淫の罪を犯していると。だからそういう罪を犯していないから私は聖いではないのです。残念ながら私たちはそういう罪の心を持っているのです。不品行がどれほど神の聖さを汚すものであるか、そのことを我々は忘れてはいけません。そういう罪から私たちは離れなければいけません。そういう罪の誘惑から逃げることで

② 自分のからだは自分のものではないこと

また同時に私のからだは自分のものでないことを覚えなければいけません。「あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを」、この「もはや」という接続詞は、救いによってあなたのからだの所有者が変わったという話です。今までの話ではないのです。「もはや」あなたは新しい所有者の持ち物となったという話です。だから生きる目的が変わったのです。20節を見てください。「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」と。罪の奴隷であった私たちがそこから解放されるために、自由を得るためには大変大きな「代価」が必要だったのです。イエス様のいのちです。尊い主の犠牲によって私たちは救いにあずかったのです。「買い取られた」、この動詞

は受け身で書かれています。神が私たちが「買い取」ってくださった。神ご自身がご自分のいのちという最も高価な代価を差し出して、あなたをその罪の束縛から、罪の呪いから「買い取」ってくださった。神のみわざです。それについてペテロは、「ご承知のように、あなたがたが父祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」(新改訳3版) I ペテロ 1 : 18 - 19 です。「傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によっ」て、いのちによってあなたは罪から贖い出されたのです。

イエス様ご自身もマタイ 20 : 28 で「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」と言われました。そのために来てくださった。ご自分のいのちをあえて私たちのために差し出してくださった。それによって私たちはいのちを得たのです。自由を得たのです。

人生の新しい目的

こうしてパウロは救いについて読者たちにその真理を改めて教えた後、人生の新しい目的を教えるのです。20節に「ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」と「ですから」という接続詞がつけられています。この「栄光を現わしなさい」というのは命令です。この箇所を原語で見た時に非常におもしろいのは、この動詞に「ですから」と日本語に訳されていることばがついています。なぜこれがつけられているのか、最初にもお話ししたA・T・ロバートソンという教授はこの「ですから」と訳されていることばについて、「それは最高の強調を意味する」と説明します。「自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい」ということを強調しているのです。レオン・モリス先生は「このことばが時々命令形につけられるのは、その命令に非常な緊急性という注釈を加えたためだ」と言います。つまり来年またやったらいいとか、もうちょっと先に行えばいいではなくて、今すぐそれを行いなさいと、その緊急性を表わすために、あえてこの「ですから」ということばをこの動詞につけていると。文法的にこの箇所を見るならば、そういう意味を我々は見て取ることができます。

きょう私たちはコリントに宛ててパウロが送ったこの手紙を見てきました。我々クリスチャンに与えられた自由というのは、一体どういうものなのか——。それは自分の好きなように、自分の肉の欲するままに生きることではなかった。例えそれが世の中の流れであったとしても、我々はそういうふう生きるのではない。私たちに与えられた自由、それはみずからの意思を持って罪を離れ、神が喜ばれることを選択して生きることなのです。なぜなら神の栄光を現わすことが私たち信仰者が生きている目的であり、そのためにすべてのことを行うことが我々に与えられた自由だからです。信仰者の皆さん、神の助けをいただきながら、神が喜ばれることを選択して歩み続けていくことです。その歩みがイエス様がご自分のいのちをもって与えてくださった新しいいのちをいただいた者の正しい歩みです。そうやって生きていきなさいと。そうやって生きていきましょう。